埴の舎歌集　中

中

伊地知文庫
文庫20
235
2

文庫20
235
2

三巻 内

月花堂
[illegible]坊
山門下記

伊地知氏書冊

[illegible]恋歌巻之中目録

恋之詞

一 絲縒筋
四 思の 思ふせひ
七 ちらちらとく
十 恋しさ
十三 （すこたまつき）酔筆
十六 うひまなみ
十九 こぬく
二 （ともよち）蝶
五 （なな）花の川
八 う紀をくせ
十一 なまぎの情
十四 見ん物恋
十七 抱乃き
廿 （なをき）彩ろ
三 （つれなき）雑菊
六 （ちらちら）振流れ
九 （まろ）妹から
十二 わざし（ちぎり）契
十五 思ひまわる
十八 （ゆきまつ）新連
廿一 ちろおとろ

廿二 ちの海さへ
廿五 うらまえ霜へ
廿八（さうり）名おもとおさふ
卅一 あ追ぞ衣
卅四 うしろめさきれ
卅七 あだおさく
四十 そむきく

廿三 かちゆうり
廿六 人乃綿（うら）
廿九（おや）親さく茶中
卅二（はいまわり）彩持
卅五 なまめく
卅八 めぐちせ
四十一 神のうらあそ

廿四（おもかげ）俤忘まぬ
廿七 あゝとはらぬ
卅 いちきなき中
卅三（やつ）古き衾（さとま）
卅六 名このむ
卅九 うさきさう
四十二 下の帯（おび）

誹諧撰集之第五

無題　燕の羽

一（まちまち）鶺鴒の尾は　床（とこ）に流（ながれ）乃あまる　灯（ともしび）のかげ

いさらあさん

鶺鴒し羽（はね）はうち出し　秋の田乃あのはせて霧を払ふ

二（うすもの）綵（ぬの）はさ

鶺鴒ふり出かとなほ流付くよし

みをうつさ居る　彩（いろ）まる　うつむる

三（つれづれ）雑（さき）色は八

舟のあやき　海（うみ）乃あそし　海は立木ある

うちしくみを立る（そ）　神は初（はつ）る　いさら

あさん　流うちし　うつゝの流しけり

早稲田文庫

松乃ち紙緒くよりしきよりぬうつ連も紀とし
法連なりし紀部嘗ふおもぬ心をそ人乃ちらなまそへくつ能
光る源（げん）氏乃法ゆあり久しく檪（わきかれ）の無阮（さいゐん）をおどろか
志すりひめ連と法連なくてありしより八法さうられ
里院のくきその宮よおハせし法無阮へ源氏よ
おの流ゑ源氏乃流れ式部（ちうふ）への流れもとめしこく
その宮よ位（もと）のぞ菩薩（まへ）すると法悪（まさき）ありし也

一四 悪心無い共　かくりも座つかく　神の滅すとよし
悪子連と家よ出母よら家意ハ抱や持り心人乃よふまで

一五 えのさ川よき　嫁（よめいり）をうらむる　みをおとらると
身をまちえそん　あるふをあるまじあん心すとよし

あかとへ玉乃おそらあの六川ハ吉野（よしの）の河乃勝（たき）つせのこと
う紀母の名を無（ひとよ）でよ名の云すひく宇治川へ
身をもそすひしとまり

一六 うきよ乃流りるよき　抱の名ふかき
よ流（え）よちさりのうろ　とれなぬ　葛（くず）の是れ落（おち）る
なすひくをとろうみ乃悪事なす紀るすとよし

一七 ちまらそくまで　いちきな紀伸　ちうひのみ
親（おや）さくら　ふきさ推りひ　孔（こう）　孔とちまろと云ふ
ならり死（しせん）の事之

一八 うれきくせよきて　身をとうらむる　親のさうし難
見とろ里の神乃ちさう

く連なゐの涙に深き袖の色をあさミどりとやいひしをるへき

是ハ源氏の乙女の巻に夕霧の源氏の中将の頃[illegible]

むすめ雲居乃かりをおもひそめけれども六位

なくせしとて大宮[illegible]夕霧の[illegible]

也けりとの袖とハおさなき人乃心に[illegible]

[illegible]夕霧の[illegible]川[illegible]乃

中将[illegible]なきさ[illegible]もしを

[illegible]

九　一　妹かりゆきハ　千鳥鳴　河風　[illegible]　[illegible]

心を流くさ　流乃河岸

思ひかね妹かりゆけハ冬の夜の川風さむミ千鳥鳴なり

山城乃こ川の里よ妹をおきていく夜[illegible]の雨よ[illegible]

[illegible]河邊乃ちどり袖さえて[illegible]の月

十　一　戀しきときハ　俤見まゐ　旅寝　いはのあたん

数乃[illegible]床まきし　拂し夜衣[illegible]

錦をまとなれとよし

いとせめて戀しき時ハうば玉の夜の衣をかへしてぞきる

十一　一　なき妻乃形見よき　一　筆の文乃[illegible]

[illegible]　親なとよし

戀しき[illegible]山の雲と[illegible]袖ぬらすらん

十二　一　あつしちさりよき　一　秋[illegible]　なき人をきおる

あけの情とハきこし乃なか[illegible]

ゐまるゆめ　櫻(かざし)をかざしけるにも志かりて

あるなしとかはしてかへて連櫻(さそう)も年ふりまはかはり今の給なり

是も小野(との)小町(こまち)乃ぎよ之小町一ふし櫻乃さかりなりけるに

業平(なりひら)のいさみ給ふやあるじもありこまちとてのく

あるへんとかはの川今なり

十二
一つ玉(たまつき)をてくるふ六ふ六　見(けん)物(ぶつ)く悪しき　役(つい)を勤む

給ふよ　さきさ櫻(きよ)乃禮(つて)　いま壺たる此役

一つん動るりよる　僕(おすけ)も連ぬ　鶯(をされ)のひま　姜のおれり

鞠(まり)の庭(には)　お目もきるれなきよし

とかふみくおかぬかのきこ八ふされ此る術(みこうる)出しきものたり

是も柏木の右衛門督(うゑもんのかみ)乃源之六条院(ろくでうのゐん)よ鞠乃

さし時鶯(をされ)乃ひよりも女三の宮と初(はじめ)のひく

はやも女三へたら給ふ中よ三乃猫(ねこ)

今さら小やくよて出そ山櫻をよそぬ枝(えだ)さしりかけさと

猫(ねこ)ぜめて連て猫(ひき)よ戸あけ中しとるり

十五
一つひよふりよき　男を庭つを　床(とこ)にたりこゝ

わかこのたえくまうこたりし

ゑまひぬ天乃りてをよもとて家をゆかちさそ紀

是もなりひらの北方二てうの后(きさき)をうひ神(つかね)

あまくまれ男をとくともの給ふすまれかうとい

十六
姫出るさあまのかるも藻(も)よとむ虫なり

一つひまとるまよる　灯(とうひ)乃影(かげ)　基(こ)　紫垣(しをうき)　出ひ給り

あさきめく　中将乃局

くひまころとハ塩竃のあそひよりみたろやうのうけ
なり源氏中将乃君へゐそろれは小君か車に乗
て忍ひく紀のかみか家に行まし給ひむすめと碁を
うつせみの女と源氏のひまころみをうつし又紫塩ハ源氏か此処へ
たちゆきまし給ひよ御座よ紫をハし紫塩のある坊へ
立よりほかに紫乃上の十計なる女の子ありとこそめ
あさましく又すまめくとあさきひかりの里にいとこ成
めいころ女そろうく能登をといせ相談によりそれを
ならひころひまころのすまめくとハうひくしなる
ちゝるちは末摘の心まへりもち紀中なり

十七
一　柏乃葉よそ　約そえぬ　うしろ若浄き　形る
なやむ　別れし宮紫をなけかくる　小野よよもむ
夕乃行方しぬ
小野よ柏の巻とうけ夕の君柏乃葉ふかく宿し
せし紫と川乃流れ約の上ハしるそれと
又あれし宮紫をなすととハひとそろ乃大和の小
の浦方流るきとの巻ふかく大和の浦宮をさる
まつゝなり小方乃浦方よ
なれをし公ひ川名紫よゆちさへるさき葉のえら
一　別まよそ　紅葉よそれ
（廿九）
桜乃門おそしよ　むすしみを紫る

いけのまゝにさひしうするむ田舎のかたまそへてるハ暁乃そら

一十九 うきぬしうまる　夕付鳥　暁乃鐘　かへり路を

床毎にそこのわかれ

廿 一粉らうふたる　蝶　ちりかゝりぬ　けゝく人

廿一 一ちりおとろしまへ　蝶の舞　荘生乃宮

ちりかとつとへちりとうりくおとろゝのや

廿二 一ちり残さうまる　粉おもふ　花の塵　狼まよゐて

廿三 一かくりとちりや大　ますこゝろ中　きゝ乃友　恨も絶ぬ

灯の本　夜鞍　ちぎりをさゝごむら

源氏物語のいにしへより絵へりつよかりの中ぬなかに二

三人の夢三人を達とうろをひく鞍をきそう夜乃鞍

かくり絵ふ是を夜鞍乃袖をかりとやまる女乃あそひよ

来わさまを上中下よりちくに見めてに是をと

各定めて中ふをてのとろ乃よれとしもやや

廿四 一俳是達ぬよまる　夢さむる　無刻歌の行ふ

写絵よむらふ　花の袖乃雲

俳ハ是達ぬ斗かまねてく大ひえいきくとる紀ての夜

廿五 一うき海まりまる　恨の流ける　男ハ女らく　猶経

花のこ三五くのてまきハ見こを経　籠わまことよう海まぬ人ふ

廿六 一人乃絡ふる　とちんとそ来ぬ　恨きなる

絡らの本代よる世ハいつり人のあとれて嫌うまし

廿七 一あふとひらぬまる　枕ひ乃流ける

糸竹（いとたけ）乃志らべのおもしろ　君をめぐミせ結まる
あふとハむすのお汁おりはえくはやさんのまうくさん

一（廿八）み術（こう）でしそまる　みみさせてきあへぬ
花乃ちりを重をさそへぬ　猿（ひ）ろ紙をさる
なかちりの志紙思ふ　花（ち）夜をぬぐさるる

一（廿九）親まくら中まゐ　まゝえ入出　ムのまゝゐぬ
花夜とハ親（おや）の娘にまろうずくのことなりと
あひおりふ　うらえをさしこむ
出るいゑハ離（れ）のまゝれわろうんなのまゝまゝろらぬ乃のも
とよみくまえ入まゝうといせ物語にあり於やさ
くろ中遊びら業平（なりひら）の流布ある

一（卅）いよ巻物絵中にハ　於やま志ろふ　ちらちふ
井津く乃巻をるとのし
ぬつゝらいとを抱くろとよ業平おさる紀にちらさ
出くろむとあとめつのしとふくかきのへならきる
ひよう巻紙に似ゐくえんとあつき

一（卅一）めで迄さぬまゐ　男をさうむつ　露をすく家袖
髪をおろふ　わろあをとくむ

一（卅二）新枕にハ　まとすゐぬ　ぬくも　ちらちらるん
梓弓　三年をまつ　いとき巻なる紀を於もし志る
あらたまの年乃三とせを待わびてたゞこよひこそ新枕すれ
是はいせ物語にありなかくはしくいちそこの

うへ前書の人とすまゝ乾之進ゑあげまして内より女
乃よむ方をまほ誠(まこと)乃彩称(よいまち)もち小路ともありひら
と振くおよひ彩称もちふよあり源氏も紫(むらさき)の上
をいそける紀よりそてあひくまいさくらあされし

卅三
一 古き衾(ふすま)は　おまつ紙　猪康(ひろうど)に伏(ふし)　鴛鴦(をし)るとは
鴛鴦の衾とく柳し兎紙打り川まくろふ夜し娘
もとよりハ錦(にしき)あやをもつて綾縫(ぬい)なりの紋ろの浪そ也
翡翠(ヒスイ)衾(ノフスマ)寒(サムシ)誰(タレ)与(ト)共(トモニカセン)　長恨歌(チヤウコンカ)にあり

卅四
一 うき縁めくる紀よそ　庵(いほ)てそく中
庵乃ぬくゐりをな紀
女ゐおうしろめくてや思ふをむおとこ山ふしぬてろとせへし

うき縁めくる紀とハふかくなりとなる紀といふなり

卅五
一 ゐる海めくらよそ　蓬(もとれ)乃内　そろかゝるとよし
雅の妙ふかなまめ紀乃をとこ下しあるとくし艶をつき
ふきめくとハびんのよもうりくしまとくるり
嬋娟(センケンタル)両鬢(リヤウヒン)秋蝉翼(アキノセミノツハサ)とあり

卅六
一 女ゐのむよそ　神の内ひ　蓬の内　艶を手折(たおり)神
女このむとはいふよもくうりくしまき衰(いしや)をこの
みくさやしやるゝ今小町ゐるとも女このむ女とい
ひりなり平(ひら)も ぬき(うきさき)の人なり

卅七
一 身ぞろくは　きくれ乃おく　神のうわり
衣のそしつたき

おさ袖くとは丸紙こうと座り乃事なり

卅八
一 紙くえきまよる　きそ袖乃ひま　人めを忍ぶ事とぞよし
よ紙うこのあまとし人をみるうふめくぞよ朽ちまてか
見るさいくう細工のまのこのひろきよみるくやまうるなり
ひろ乃雨あなりとめくるはせとはめまぎさをうる事也

卅九
一 うれさうりよいは　まうれ紛菩乃女　月よ女をむすびくは
下をことに残りよすまうこ思ふとなれよし

卌
一 そむきくみれは　根乃ある　とぼし灯乃影

卌一
一 袖乃ふくろ具は　しれぬる紙　かけ付ももれぬ
花の下伏　薬をつむなどよし

卌二
一 下の帯よる　ふくろ袋をとえらうこさ女也袖のおくきつむきをひてよし　ざこね雑寝　ももぐ　なま生るてとまり
生るをとまりには懐服乃内をくおびとく下ま
おひをとるなり

松葉集名所和歌第六目録

一　うぢ　宇治
四　うぢの里
七　さがの　嵯峨野
十　すみぞめ　墨染
十三　きよたき　清滝川
十六　はつかしのもり　羽束師森
十九　たま　玉の里
廿二　をしほ　小塩山

二　宇治河　久
五　をとは　音羽山
八　みつ　美豆野
十一　をぐら　小倉山
十四　小野山
十七　かも　賀茂山
廿　井手里　で
廿三　よど　淀川

三　宇治山
六　みなせ　水無瀬
九　ふしみ　伏見野
十二　おほゐ　大井河
十五　おほ　大原山
十八　うめづ　梅津
廿一　ときはの　常盤森
廿四　かつら　桂川

廿五　とば　鳥羽
廿八　いはせのもり　岩瀬森
卅一　たつた　立田山
卅四　とぶひ　飛火野
卅七　たかまと　高円山
四十　あまのかく　天香久山
四十三　なには　難波
四十六　あしやの　芦屋里
四十九　ぬのびきのたき　布引滝

廿六　かつらき　葛城山
廿九　ふるの　布留野
卅二　とをちの　十市里
卅五　よしの　吉野山
卅八　みむろ　三室山
四十一　さほの　佐保河原
四十四　すまのうら　須磨浦
四十七　ほりえ　堀江
五十　こやの　昆陽野

廿七　はつせ　初瀬山
卅　三笠山
卅三　かすか　春日野
卅六　あさはら　朝原
卅九　ますたのいけ　益田池
四十二　すみよし　住吉
四十五　いくた　生田
四十八　しま　三嶋江
五十一　いこま　生駒山

五十二 たゞすのもり 糺[illegible]森
五十五 あふさか 逢坂山
五十八 大ひえ
六十一 [illegible]
六十四 かゞみ 鏡山
六十七 [illegible]山
七十 さらしな 更科里
七十三 さののふなはし 佐野舟橋
七十六 [illegible]山

五十三 ふけゐのうら 吹井浦
五十六 しがの 志賀浦
五十九 たなかみ 田上
六十二 いぶき 伊吹山
六十五 まの 真野
六十八 ふはのせき 不破関
七十一 きそぢ 木曾路
七十四 くろかみ 黒髪山
七十七 すゑのまつ 末松山

五十四 たかしのはま 高師濱
五十七 からさき 辛崎
六十 ひら 比良山
六十三 あはつ 粟津野
六十六 [illegible]山
六十九 くらゐの 位山
七十二 すはの 諏訪海
七十五 もかみを 最上川
七十八 まつしま 松嶋

七十九 しほかま 塩竈
八十二 [illegible]山
八十五 あさか 安積山
八十八 いくの
九十一 [illegible] 三尾浦
九十四 しかま 飾磨
九十七 まつほの 松帆浦
百 なち 那知山
百三 ゑしま 絵嶋

八十 しらかはのせき 白河関
八十三 白山
八十六 たこ 多古
八十九 よさの 与謝海
九十二 いなみ 印南野
九十五 すま 須磨
九十八 ふきあけのはま 吹上濱
百一 たかの 高野山
百四 しがの 志賀浦

八十一 [illegible]山
八十四 [illegible] 竹浦
八十七 え 大江山
九十 たまの 玉江
九十三 あかしの 明石浦
九十六 きびの 吉備中山
九十九 くまの 熊野
百二 かしまさき 鹿嶋崎
百五 えさ 絵崎

百六まつら 松浦
百九 二見浦
百十二 ちくもと賀
百十五 浅沼
百十八 清見
百廿一 箱根山
百廿四 隅田河
百廿七あはぢしま 淡路嶋

百七 大淀浦
百十 鈴鹿河
百十三さよの 小夜中山
百十六たご 田子
百十九ふじ 富士
百廿二あしがら 足柄
百廿五 霞のうら

百八 伊勢海
百十一なるみ 鳴海
百十四いなさのほそえ 稲佐細江
百十七うきしま 浮嶋
百廿 うつ乃山
百廿三むさしの 武蔵野
百廿六つくば 筑波山

類船集巻第六

一　名所記　鵜飼舟　網代守　槇の嶋　椎が本

一　宇治よ　中宿　秋霧　柴舟　橋姫

朝日山　むら鷺　網代布　氷魚乃よる

鵜飼舟あはれとぞ見る武士の八十宇治川の夕闇の空

朝ぼらけ宇治の川霧たえ〴〵にあらはれわたるせゞのあじろ木

わか[illegible]六条河よ稲葉をたてゆきをあらしく秋

ますら男[illegible]まよりあみをあみくさきてま

ちゝもとゝう

秋の月かゝる網代のひをまでも年のよるとぞ数へられ

菊紅葉の色もうつろふ九重におほはるゝ霧の志ちらに
氷魚（ひお）網代とハ宇治よりつゞく小舟まで
芦み八夕乃瀬や舟さしのぼる山乃秋のちらすその
里の行きの牧の椎（しい）柴むすめ女なれと舟よりてや
菊も思の大和乃やかまくらの渡しの流れをそのかへる
くの末の大和の流れをそのかへる舟の鈴のあれ
ちる椎のむら乃枝くあまの鈴ふくの流れく
いく志椎の舟れまさるよ見えさり
山おろしま落る木のこ乃舟より色あかまくまろまて瀬
芦も乃波乃流れむこらむさくのさ乃流れむまめ橋
姫（ひめ）乃大姫君と中の君とかねいりており

あら何月乃さやうらの流二不し琴の音乃ひびき
乃芦紛志る人なくらん舟入りにまま本乃ものれ
きのせみえくるあまた
秋瀬さ宇かけらの淀乃ものやまと瀬（せ）よりもとかへりあまたのそ
あまのとかふ舟とふ川てかなたの舟なかる
宇治もさから川霧（きり）ちこめくる雲やよこゆるあさ日山に
白露もちりやるさるん山城（しろ）のうら紅の秋あさ乃む
山まで伏見里まで伏見川より伏見流れに別れ
為し地準く（たこれよしかんを）

一二 うら川よる　うらひ舟　一　あじろ
一三 うら山りし八　志る　さうらひ

一四　うちの里によむ　　調布

いにしへの名にのみきくも此所にたえたるへし

一　吉野山にハ　うきひの名　瀧　雲の下にも　お坂

かすみ　うくひす　松虫

お坂の名のみにすさまし八吉野の山のみたるから

吉野の山にや嵐の越津にせ流れ落こむ雲の下にも

あきにさへ吉野乃山の木かけにゆるく初瀬のさくら

お坂乃関のこえし九吉ハ流吉にさてある吉ハしさにくゐ

ま川虫の鳴にきさて秋風に吉野山から吹そとめたる

おりし岩乃のる風みとゝの吉に紅葉をいさうるくひさと

一六　水無瀬によむ　　鹿　尾上の鐘　瀧　山本　み雪

桜　蛍　千鳥　青柳　夕かほ草　款冬

見渡せハ山もとかすむ水無瀬川夕へハ秋となにおもひけん

水無瀬山木の葉乃ちるや尾上の鐘乃声そきこえて

となせ山夕かほ草の下露や秋まつしるへとなりぬらん

おとしより若くいさなふ秋の霧に吉の山のさくら

見なせ川ちらぬ桜乃稲つよ桜の流れてたねはや

ミなせ川わかそ紅葉なるて桜の文ら六ふ霞ハ流れてなかとこふ

川こ山と里と村との付合なに此所かあるへし

一七　嵯峨によむ　　み雪　女郎花　小倉山

小萩　鹿　古郷　白露　虫　野の宮　さくら

名をよめてまたうかりそさるへ露おちかふ又と人そ語る

夕くのさえ乃虫も衣や人乃おもふらん衣きてそとらかる

小萩咲雅まく紅にほひさうの露きえしまの里は

ちる人もなき衣初ひめ人ぬ秋乃さかりをちらし衣

かすのよそに秋乃さかのまとりくもちらおとれ秋とや鳴らん

夕されは蟬のさわく鹿のねに山のかきす秋風そおとして

乃渡せしさらをきまの浪ぬのむそのおほふ浪ん

一八 巨椋池よミ合

淀河　蛍　夕かけ　浪とゝ

舟よはふ　五月雨　駒　まこも

まこもかる淀川乃さは水のまこれ稀なれめゝ渡と時鳥や

こゝろちるゝあら人の袖よゝ淀乃に夕ぐれのもり

山城の川乃里に嫁ゝて以淀の舟よはふらん

草深ミかくるむしそなくなる川の月かけすむ乃夕くれのころ

秋風よあのさまの乃ましとよもかりゆきも川そ紗あるを

刈くかをとる川乃見ましの家もと乃城のあふる舟よきを

五月雨よ淀の深そいさよふ乃浪乃よもみの流にゆかしろ

一九 伏見よミ合

夢　妻とふ鹿　松陰　木幡山　田鶴

枯葉　新枕　女郎花　さゝまくら

入江　深草乃里

伏見山松乃かけより見渡せはあくる田面に秋風そふく

伏見山はうとふ志らの渡やかゝやかの庵乃あきさの家

海とるやこゝを世なまても山城の川乃里に新枕もする

菅原やふしの里乃さゝまくら幾夜もいく旅乃人ねぬらん

夕されハ伏見乃野への[illegible]下ゆくそ色くさ心ちよそにまよふ

よ隠れて伏見の里乃うち津にて心をちらハてきさらにまた

菅原や伏見乃里乃あれまくもをしむ後その野へにまかるなき

狩衣や伏見乃里とよみてハ大和山城下

一深草よミ合　鶉　鴫のはね　女郎花

露乃苔　伏見乃里　松

かりの世の鴫のはねかき絶やまたく鶉よ鳴ける深草の里

草深き露乃苔よ来かゝるを

是ハ深草の少将乃小町に通ひし

年をへてすミこし里を出ていなハいとゞ深草野とやなりなん

あれハ業平の御おもひハ世を捨てよめる女をおもふさ

かくてや住ひなん嵯峨野をとりみて出ていなんとせ

ひとりあり深草よりそ乃ろのすまゐ

夕されハ野への秋風身にしみて鶉鳴なり深草乃里

深草の野への桜し心あらハ今年ハかりハ墨染にさけ

一小倉山よミ合　紅葉　小雪　小鹿鳴　附る　野分

桂乃野へ　大井河　夕月夜　花薄

嵐山　附虫る　このの木乃もちる

さくら山よの立ち[illegible]くる春の頃よも秋ハ入れぬる

思ひよ[illegible]康の[illegible]よ見えとまくの山乃おくよ

あくる山嵐乃木の[illegible]附虫も萩をぬらて鹿

秋くる山よの木の葉もの名よ出て古今小倉今も錦えん

名所絵にも志乃かゝることゝひとなくさむるの山にとりさそえ

おほかたさるところの山水名月桜木のもみちの景に於てはことに多かり

はや小舟をさして此山乃麓なる大井川そこを意(こゝろ)ものとてたへなく

一十二　大井川にて

千鳥　筏(いかだ)　渚(なぎさ)　高瀬(たかせ)舟　入江　井関(せき)

小倉鵜(こくらう)　松か崎　桂(かつら)河　嵐(あらし)山

清瀧(きよたき)川　鵜(う)舟乃篝(かゞり)火

大井川にては筏におもしろく井関にてまたおもしろき所也

大井河にてさ古来紅葉の入江乃松に夜さえしれぬかり也

大井河にて○乃松の花色のそまさしめ筏士(いかだし)ゆるかたとなり

大井河入江の松におどろかんまてゆきの紀とかりけると

大井川は小倉鵜舟紅葉乃源氏松風乃巻に源氏大臣

乃おもひにまかせてとくかへり紅葉をわかつのよしきこえ入

堰にまかり月ふた夜ありて京よりかきそへ給ひておはしまして

大井にも二三日とゞまりて京よりまゐる御気色(みけしき)

桂(かつら)あたりの大のさまにて秋の月よりもとにかく小

鵜(う)舟とよひ河を飛ちるおもしろさ(まさき)ふ中也

大井河せてに筏(いかだ)おろして河をうかふ

大井河にても鵜舟乃かゞり火にて渚(なぎさ)の末乃紅葉やちるらん

高瀬舟志るかたの紅葉の下にくだる大井河に

一十二　清瀧(きよたき)河にて　いかゝ　雲乃さけ　附　岩間(いはま)

木のもとなから　やまかけ

筏(いかだ)おろす清瀧川乃岩かげにさくらぬれぬものかな

清滝乃せゞの里家秋くれ者もみぢの錦をそゝく
滝清しきは峰乃もみぢはよそより清滝川乃水の景色
高雄に近き清滝川のほとりやまれは滝おちたるをしれやまふき
一 小野乃奥よりは　炭竈（すみがま）　麻の子　手ぬのひ　杣山（そまやま）
松茸　蝶（てふ）　机木（つくゑ）　菱（ひし）　柴車（しばくるま）　青苔の里
いまにくゆるよすがむかしの山乃おもかげおぼろげなるの滝
もとより炭竈の煙も雲もやまの雲ともなりかり
大原やむかしのもとまゝ雪ふりてむかしそのかみの川かり家
都まかる其の山へかよふあく柴清しくる夜のやま今
あらひすてぬや袖ぬれてぞ小野の里に来ても春深く
忘れては夢かとぞ思ふ思ひきや雪ふみわけて君を見んとは

先ず業平（なりひら）の旧跡あり惟喬（これたか）の旧跡の跡山家（やまが）をくく
その折くは雪の中をひとゝ小野へおもむきまして
よみ給ふ哥の跡なり
一 大原よりは　薪（たきぎ）あり川むし　流菜　小塩（をしほ）　祭（まつり）
松茸（まつたけ）　炭竈（すみがま）　鶉（うづら）　うるゝや
さひしさこそまされ大原やせゝ炭かまの煙のそて
都をもや霞の山をもふりて神代のことをおもひ出しめ
先ず業平乃旧跡に二条乃后（きさき）の氏神（うぢがみ）へ参り給ふ
附 大原めぐりよみかんのひしたる里
大原や朧の清水かゝみの中のうつりてみそれけるかな
大原の雪は二月なり

一（十六）所思によき　かくれ家も　森乃下店　賀茂山
神山　あふひ　雪　松乃尾　ならの小川
かくれ家を数多結びしを所思の森乃雫によそふやぬれ衣かな
春くれたる花ともかなと所思乃松の上にあはれそむる
発乃都御孫あそてみえしこそ君か代ならん霞たつ
一（十七）賀茂によき　鮎　檜川　くら部　秋山　神垣
宮内　松枝　若波
ちはやふるかもの河風山あひの袖にぞさえし雪さそふらん
ちとせまで榊のもとの河風にかはらぬ波も手すゝく御の泉かな
賀茂の社を四月なり
一（十八）松か崎によき　岩か根　氷室　鳥の兎　涼しさ

寺　紅葉　冬　松かせ
衣の日を染かけまつ松のこゑやひむろの里に月ぬらん
一（十九）玉河によき　調布　衣川　井手乃里　志のぶ草
卯乃花　秋萩
秋風の音きく旅ねに衣川あさく玉河
玉川乃さらす布をも日数ふるまにひかり花と移ひぬらん
衣すゑぬ身をいはしらしも袖の花乃袖にぬるゝ玉河の里
あさのえん野路乃玉河に花さくらかけて浪にも月やうつらん
ふしかりや萩の花さへかきて水のうゑなる玉河乃里
一（廿）井手乃里によき　やまぶき　蛙　玉河　風そよぐ
山吹の花さく頃より蛙鳴井手の里人そよかはしかし

駒とめて猶水かハん山ふきの花乃露そふゐて乃玉川ハ

一廿一　常盤乃杜とあらハ　躑躅　花　鶯　簾　撫しも

紅葉　注連縄　紅葉

志ら露の色をいろくと紀その杜乃露乃ちゝよ出さき風乃音ふきも

紅葉やぬるさき山よりも秋の露乃秋嶋ても秋ともいつまん

紅葉の木間のときのる杜の露をぬれぬ木下に秋ハときは乃に

ゆふ露乃ときは乃杜乃秋風の内志めおもふ玉そくゐる

秋そとハいは乃うへのときハの杜よ鹿そ鳴なる

一廿二　小塩山とあらハ　行幸　志くゆふ　榊葉　松原

大原　白雪　紅葉ちる　御幸　木からしの風

継子

をくら山松乃をとつゝ夕霧よ夕日そゝくみる木の葉のこゝろし

紅葉も白ゆふかくおなしものゝ山よ緑まつのは

ちよまつ緑代も志らぬ大原やをしほの山乃松の白雪

行幸あらハ秋の紅葉をはなをしほ山小松か原よりもやハせし

緑の月影をもあらさゆきをしほの山そ御幸てそ紀

をしほ山嶋のちるハいておれて松よあらそふこからしの風

雲ならきをしほ乃山よ立まよふものきはも雲よ六のちめぬ

一廿三　清滝川とあらハ　みかくれ　榊葉　あやめ　車

まくらも　檜皮をとこる　舟よまて　莖豆磨

あやめまちわかぬまことをひかなさらに清滝の志らぬあそ

ま秋をしられさらの榊葉の名をもとめ花もるこの

立河よりさねかつら来すらせておほえく流の添ひせまりしや
かさゝぎとぞ橋立河乃海のかなたき
山城のとらの里に妹がりくいくひとのと乃母よりらん
綿し津久流乃きえ方をなさきよれたとく家たかく来しまらり

一（廿四かつら）桂河よる　おも　大井乃里　藻よるむ虫

月のすむ河乃をち成里なれハ桂のかげハのどけかるらん
光る源氏かつら河乃ほとりに御堂を建ゐてゝ小侍従泉
流ちう源氏へ来て世し侍るなら源氏より流るの
冬の光よらえかちしく翁文ちうを生きてあやきさかし
古道とゞつかの里より花のへ乃流みるのあり山里と
名付く源氏家より所くさの姓ひく住を述

桂河てる月のかげ乃宿かりたる秋ハすこしはむ出て底にみゆなり
冬の中すなる河はかゝの母ハ明よりちゞかく底こそ待くらん

一（廿五とくさ）衣羽よる　須磨ね　稲葉　松風　村雨　秋風
流乃河舟

須磨の浦羽国乃いなばも打すゝひき家をとまりし風浦の音
八百萬や羽国の稲葉をうち吹そよ源氏乃民そまうよすり
冬の道へ羽国の家に風もえくむら雨ひく空乃山里
秋風乃吹くる国の面を吹かくへくかれよりに流のかけを
里の家をましらせよあらむまに吹へくし松乃かぞや
千代住ても民の松や生えさらんとこの里也のまゝ外々に

一（廿六かつらき）葛城　青柳　学　いとゆふ　正木　岩橋

桜（さくら）（はなの中）　春雨　高円山（たかまど）　立田山　白雲　佐保姫（さほひめ）

豊浦（とよらの）寺　雲の上井　桜咲

をはよのえみくやかんさん浄らにや春のよの山乃峯（みね）の白雲

春霞乃たなひくさ山のはつ紀日ふ宮も見とりよあるふ心とゆ

あさとりかすみ春かゝる春霞のたなさ山の春雨乃そゝ

桜りゆ雲よ嵐（あらし）の名もちらる雨（まさ）木乃たなかの山

たなさや佐保乃桜咲よなりた田のおくよちら咲つる雲

浄らにや豊浦れるのえ乃も雨ふ桜白雲ともつ月影

さほ姫乃たなさ山乃たらゝ霞こゝ花くるのくまやさ

みまくよ桜（され）むちん浄らにや豊浦乃ちるの春風吹花

たなさや春よの山乃雲こそより雨まよそのともむ雲のふ

一　秋篠（あきしの）によそへ　桜　枕むすふ　尾上の鐘（かね）　布留（ふる）野　旅人

旅寝　檜原（ひはら）　村雨　寺　新（しの）るちまきら

あきしてさしあへし　庵の月

年をへてあはれる鐘ハ秋篠山尾上乃鐘のこゑ乃夕くれ

二　すゝの枕乃ありとさ路よたえふかき河の衣よ思ひ紙のまよしや

見ハ春（うえん）道秋をゆくもろくよめくらあめ一時の声

秋せ山こよの廉のねさそひきそ声ゝの声（こゑ）よさよく秋風

らりゝ今年秋さの山おそしよ見くしれとハ新るぬとの色

今やさんをあられふそこ花そむるの夢（ゆ）よ木の花ひみる

是ハさそのつゝゆき秋さゆく旅ゆそくよみんし哀

なり菊と梅乃あとたち

初瀬山ひはらか末にくもらねと秋のよまや月のいつらん

ちうき河見をさらの[illegible]に雲[illegible]まにいくへも山世よもいかゝるへき

いはせ山[illegible]をおと[illegible]ゆく[illegible]の[illegible]をもみちみえて秋ハきりにけは

ちらぬ山夕[illegible]雲よ[illegible]の[illegible]おもしろそ秋のむらさめ

いはせ山本の[illegible]秋風よまいはその[illegible]しるの[illegible]

一 廿八 岩瀬乃杜よハ　うへ[illegible]と　ち[illegible]河[illegible]　神南備山

神なひの岩せ乃杜のちり[illegible]の[illegible]秋[illegible]

思ふ[illegible]よ[illegible]やさ[illegible]ん岩[illegible]の杜乃[illegible]の[illegible]

一 廿九 布留野よハ　小篠　[illegible]　中[illegible]

清水　園中　高[illegible]　[illegible]山　古き社

玉[illegible]　杉[illegible]

[illegible]ふる乃[illegible]の[illegible]く一[illegible]かり[illegible]ひ

[illegible]の[illegible]のつ[illegible]の清[illegible]

[illegible]乃神杉[illegible]まくよ[illegible]

いその[illegible]のやまの[illegible]山

[illegible]乃[illegible]の[illegible]ひく[illegible]

[illegible]そ[illegible]の[illegible]

いその[illegible]ふる乃中[illegible]よみ[illegible]せまし[illegible]

一 卅 三輪よハ　杉むら　神垣　市人　山[illegible]　檜原

花　[illegible]　山姫　長歌　初瀬山　佐保[illegible]

[illegible]まも[illegible]の[illegible]ん

花乃[illegible]杉[illegible]三輪乃[illegible]社

三輪乃山暮ゆく春霞志るしの杉もみえすなりにき

かさしけん三輪のひはらの嵐なくもまそまさへ春ハきぬらん

山姫乃そむるかえりをありとしや三輪のひはらに春風そ吹

ゆふくれを隔かのこま乃鐘(さき)きくさの渚にむ袖をあをやまて

一（卅）三月ニハ　柳の芽　款冬（やまぶき）　又紺香　飛鳥（あすか）川

卯の花　三芳（よし）野山　藤のしな　瀧殿（たき）

志つ　松の葉　杉乃山　葛城（かつらき）　雲

神なひのみむろ乃岸（きし）やくつるらん立田乃河の水乃にこれる

立田河すゑくに紅葉錦かゝえくなかれとらそそさとる

夜寝ても三つその松の葉さとしみんにありくよろしきところや

三つ山ましらとも秋ニうえ紀の又の葉さとそ風ぞたちむせ

風ふきておきつ白浪たつた山よはにや君か独こゆらん

是ハ紀有常（ありつね）かむすめの事也業平（なりひら）かよふやまとの

里へかよひ給ふを立田山をこえてかよひ給ふ

ある時ハ河内の国のたかやすの女業平を思ひ

居りて琴（こと）をかきならしてよみける歌なり

むかしをや思ひさまよひて立田乃山のこえひとのよし

卯乃花のさらくて立田河乃かたハ紅葉にとそ

一（廿二とをち）十市の里ニハ　故郷　蚊遣火（かやりひ）　夕立　天香久山（あまのかく）

雲ゐる十市の里乃秋や火螢（ほたる）もみたれぬるかな

十市にハ夕立すらし久かたのあまのかく山雲かくれゆく

一（廿三かすか）春日野ニハ　若菜　梅か香（か）　うくひす　さわらひ

（語路中）

簾　神垣　おとろへ下　花火（ひ）燈　あそび雪

下もえ　子日の松が門　雛子　萩（おぎ）乃焼（やけ）原

ほうふとやささをあるゝハあれかすのとをひのもる（もろさく）咲や梅らく

春日燈の御影を見やくとみえなくよ下めし夜（まこ）つ春のさくら

かまろ乃下のえすまろ京のとほ道ゆくゆつ春のあいは雪（ひ）

春日の子日の松をとりつまく神すそ祈る声のあひと

網手すゝ花のえ出るとは夕の妻（つま）やあそれかうそともとも

かまろ花の奥むさ紙乃まろ秋三の家乃まされかうまり知（しら）らせを

うすまく川の流乃子との梅乃花山下風よちらうすゝみ蓑

卅四
一花火燈によき　雲（ひ）雀（え）　蓑（まとひ）　まとひ　春月燈

花ふつむるまとのし

雲雀わる花火乃原よ家ひとり燈よ世よ咲や葉さえつむ

とふひ燈よりえ出よりさまらひを焼と夢をやへの杉られ

花そふひとふひ乃からまつ春日のさ婦の面のあとや行らん

卅五
一蛍燈によき　漁（いさり）火　雲の隙　やまぜ　夕まぐれ（ゆふ）

かゞりとゝ　類火　荒乃うけ原　多殿（あかけ）　鵜

かまとゝ女乃毛（ふところ下）　夜の川

見よりの山乃秋をさよ文く雪さむく夜の川まち

あかひ燈を行き紙がれめてよの嶽乃月をしらん

よし燈河の川の浜乃河のよ鴨を鳴るの山がきかせ

夜よともめハ紙かを夜さうこ荻の山乃きたおそらやけん

見より燈を消えを秋の春乃そう露の夜ふて消えを

もらりまくらもさめよよしのはなをよ梅らし落の山ほ
見よし野のかくら乃野への花さくらふさかく春にふかれ
よしの河まろとみえぬ夕霧にやまをの流乃音のこゑもろ
もみぢのちりかねつるよしの梶におちつる水乃浮舟
一卅六番よの 細原には　鶯　女郎花　なでしこ　ころもを
露をそてかくらぬやぬれりやわさの風ならくひとの袖
春風さそはれぬの花乃女郎花も一枝折らむ雑はぬれつゝを
色にそむ花ぞかれぬに一枝さらや山となでしこ
一卅七 つきもの山にまた　秋萩　尾花　なでしこ　むさしの
附　花薄　野分の風　子規　有明月
住なれしおのかる露山路せめくれて里に落くるむさゝびの声

ちる露乃尾花もしよ風にふかれてむらくも白露なまふよりく
ちる露の野分の八重萩乃むらさめ夜さめぬ人ぞまち
ちりまさる秋の上野をそてそしてのむらさきのうさせる
住るにの色にゝゆかしちる露乃野への小萩に渡むらくら
女郎花やちる露乃山のやまよりかさしそよもちる月
ちりまさの野への子雉乃むさしく秋もさこそここの風
ちる露乃野辺の秋を色よりはなれ人乃袖にかゝり
一卅八 なまめく山にまた　袖垣　萩の花　萩木
附女　立田河　袖菊綴　虫の音　荒小萱
尾花
見むかしの山ふりしのおもかげとかく嵐のそこによるの虫のね

神なひのみむろの山に霜ふれはゆふしてかけぬ榊（さかき）葉そなき

かんむろ山河霧をたちぬ雲のうへにもみちはちらむ秋の夕くれ

三むろ山おろす嵐のさひしきにつまとふ鹿の声きこゆなり

見わたせはみむろの山の巌（いはを）小菅（すけ）ねもころわれはかたおもひそする

立田河もみちはなかる神なひのみむろの山にしくれふるらし

一 （卅九）荒田の池（いけ）よ、　あやめ　玉藻（も）　うきぬなは

鴛（おし）鳥　あしか　入鳥（いるとり）

せりのとるこの池のしるしれはなかくぬあやめ見えしれぬなり

荒田にやまとの池の入る鳥の玉藻にあそふ姿をそみる

思ふことかなふ池のしるしにはもちの月さえやへいり

せりのとるこの池のうきぬなはくりかへしても見えにけるかな

一 （四十あまのゝく）天野山よ、　白雲　夕月夜　衣浦　十首

乃里　かくれ浪　梓（あつさ）杖

河内なるあまの山里あとたえてあまの河原のゆくやまの

夕月夜よあまの川つ霧やこそおもひつゝ秋の霧のまの山

衣いかにあまの河霧ちる人の面影をしたふ山のは

久方のあまの山かけあまの川ゆくすゑのこのまのはく

いそくまに神さひまさる山の梓杖かけて苔の衣そてまて

一 （四十一さか）佐保の河原（うへ）又ハ　若菜　千鳥（ちとり）　子鳥　天津雁（あまつかり）

むかしとてあさ杖のかすら

田鶴（たつ）

秋やかなかや高しさなく雲も末の浦風にさそふ千鳥か
住の江の浪乃末ふかく追無く風に流るゝ松の木
あまの川らくさくろ住吉山の松にむかへる文月の星
名くまも住の浦風にかよふ鶴も猶ねくろしらへて鳴

一住吉にて（四十二ちやう）
松原　夕波（きしのうら）　わすれ草（すまれ）　市人（ひらう）
遠里小野　岸浪（かれ）　杜若（きしのうら）　淡路潟（あはちかた）　あらし
小まつさ　霰ふる

住吉の松にも末乃夜の秋風乃かよふらん千鳥なくらん
住吉乃浅沢小野（あさざはをの）乃かきつばたあかぬ色ゆへ今日もとまらぬ
住よしの松乃嵐や夕るらん夕浪よするきしのまつかぜ
あはちかた霞のたえまひらく乃むかふ河面をそめてまちぬ住吉の松
なかくたまのゆきを待らん住吉乃岸に生ひし小松も若葉
住吉の浦にむかひて沖におしへて浪の花さへゆくまとか
月ひとりあはれなる住吉乃松風つくもぎ海さらつ

一難波にて（四十三ちやうも）
芦原（新）　梅　寺　鐘　なくし　蛍
堀江（て）　入江　田鶴（づ）

難波かた汀（みぎは）をしなくち鳥の香をおりそへよ匂ふらむ春の花
住吉（すみ）をまつも今ちる風難波なる芳も散れとあしのかれ（いまも）
津の国乃難波あたりは堀江の田をかり蘭とまぬくれぬきさき
そしてやかな堀江乃白むかふの水にほひちるかせちら
難波えの田鶴のも夜々をすゝみちる塩よちかきつ
難波江の芦まもふかく蛍とハかまの水にみたれあかるらん

塩やくハ難波堀江のあしのやにすみ乱まくもとふわたるかな

難波人あしひく屋にまくらとふ神の志たるかな

一（罒四）すまの浦にハ　千鳥　磯千　焼（やく）しほ　鳴（なく）

塩衣　雉子（きゞす）鳴　松を柱に　写絵（うつしゑ）　在遠（さきのへ）

海人藻塩（あまのもしほ）　柴焼（しばやく）　忘れ水　琴（こと）の音

うし須磨乃山おろし

あわれなるすまの関にこそ須磨の浦にて海のかれ

須磨の浦を住まの関守たちいまされのほとりのさきのひの月

須磨乃山のすまの浦に風吹くもとのよみのおとのさこそ

すまの浦やすまのはまに海にあまそて見れハかなくこゝろ

かなしきいせのあまにまつりかくそさるひのうへ

昔は須磨乃せきやまで此の内の国なり源氏（えし）を世へ流さ

れしより須磨をいせにかよへていせのあまを

いせ人乃すみのとをく小舟するあまへてのろまし袖を

昔はいせの事をも海人の塩焼乃あそひのかなしを

あまの住むすまの中にも藻くれなく流れまくは須磨の浦にも汐たれ

身近しき源氏を須磨にあくの海辺に

きかふさとうち流におとろきて上海の上野乃雉子（きゞす）啼

山川乃麓より古郷を思ひてやまとふる里人

あまさは源氏乃海辺より須磨にまく燃え川を流紀

志く海人の須磨に山河にとひのみへなれハ柴と心

扨とても燃とまりてなれハ住ま附よりて月にましてなりし　なる

まちえ小田介あらいも海の浦よりしかれつまみとある令よ

一（四十五）生田（いくた）まで　名所揺　鷺（さぎ）　森（もり）　玉藻（も）　風吹（こうふく）

ちさるとてさるあめりなとよし

ふまゐなとく生田の池よりくるの森てや宮（みや）さき杜（もり）の杖

脇面（わきめ）の生田乃森乃本ゆいきのとしきれ名ありかこ（ことを）

乱には生田の里乃蛍もゐる神よる杖の宮もあ（み）くり

清乃屯の生田乃池よ高もいたしろ宮ところにやせる流らん

名く乃本乃た手（たなけ）向く杖いは生田の杖よ門（その）敷しなから

一（四十六）芦屋の里まで　飛蛍（よふかう）　そと橋　難波（なにはま）　海（あま）の塩やく

芦乃やれうをむこの芝桜乃のよ（か）さむろしさの宮

芦の屋乃あたこの塩桶（をけ）いと海やさき門まのせりもくてさきま

芦には清乃宿むさこのうらさとめし屋乃里中く宿（あけ）

平乃むらしの宮岩くよ江の内しさるよ

いさら次への芦屋乃光り（ひかり）のみえそれしやの里まで蛍（ほたる）かふ

一（四十七）塩（しほやえ）屋まで　鵜鳴（うなう）　舟乃のりる　鴨（かも）　まこともる

海こもろかり元まて待く内ら鴨乃森よの宿けいて里（はま）

宮瀬（せ）舟の初る清り元乃舟ぬめわさまくれくわえ門（もん）

塩屋より鶴塩濡（こう）くまのゆつくらぬとる世は流しさせまして（きく）や

一（四十八）三ノ宮（さんのみや）まで　須磨　芦乃屯（やけ）　ゆきれめ　あら家（まけ）

あら雪

三ノ宮の宿や須よ（ふ）さと花乃さめれ裏の家乃ちまよ門らふ

見乃おえやわしのうれ夕霧浪（うすもの）ちらちとむやまの浪の

三嶋え乃入えよ知らする霰（まけ）の音ぬ人倉をあらはしつゝふ

樹さ今まかよりぬと見えしまの元乃角（つの）くむわれよおハ雪そふ

一　四十九のひき布引乃滝（たき）にて　山姫（ひめ）　いさよひの紗

布引の滝乃白ぬのとえわかそひくすまるゝ布その流れ達そ紗

引わへぬすよ逢そまる衣の袖よまろぬ達く衣く布引の（さゝ）流れ

ゑ訪衣紋もそふつみすると結ひの浪乃滝よい川しまるゝ（かん）

あれもそ紗やよの花衣まるあふおとゝ引流れて布

引乃滝を見んよのかりく滝をみくよめる

ぬきとりてるゝ今そあまり白妙のまゝあく糸まう（しも）糸の世を経よ

（うら）え葉草乃流るゝたも布引乃滝中くしあつき

一　（弄うさ）何雅さ只　猪場（らも）　貴くまと　流（まき）　わくれ呼

鈴（まき）雲（みね）　鵜（うら）鳴　梅（うめ）乃お紫

又ぬ乃そのまる立雲（しらう）そうとくれもそぬ雲ハ布落（おち）

猪は葉もかくれゆまふえぬまふえ乃お衣まさきこそ流るゝ

流れ猪まるその帯へ乃絲去の無まと君のかゝもそあく

立ぬぬぬ紫乃衣そあまくまろ山姫乃ぬのひさの滝

鈴鳴その上ちるえずお紫ちぬ汁よあまき色そくく

ちくしかその吉（まさ）葉杉森く流の浦せ月まろふ

一　絲鶴山（こま）にて　真乃浮（うき）　あまの寿　雪の白き

村女　お紫　樹女寿　（きう）鶴鶴　大江乃きし

絲鶴山もそ女葉く出る月の雫まそうらゝ流れあかし吹るゝ

まの上ふそ雲の立ましひくろふぞものまゆせうしと逢ふゝ

あ道も東華乃ゆかりを語りつゝひはけふはてわれ
乃ちへいきたるは河内の生駒（いこま）山みえくるあたり
かはらしも雲をへてそ生駒山志らくもかゝれとも見えわかん
猿まちたるをそ見えて夜かゝる生駒乃山も雲かくれつゝ
あらし吹生駒乃山のやまかせ気色にまかせて月影
まくらかへや大江のきしにて座とりてやすみゆる生駒山ぶ
志らむかたゝきんらん生駒山をふかくてそあはいふかきそ
五十二　一　篠田の森（もり）にて　かみとまきは　永河（いせ）　金（きん）　鶴（つる）のまし
篠のゝ篠田の杜もれ時雨ゝそ葉まよふ寒くゝ時雨つゝこそ
今日あまた春の乃枝の千本ほとふちえのえくことん[illegible]
風乃音ま枝乃ゆかしやほゝ川篠田の杜乃[illegible]

千枝（ちえ）よろは篠田乃杜の下露もふかまつ雲やかれ坂乃ん
五十三　一　吹井乃浦にて八　田鶴（たづ）　きよみする　若菜庵
汲のさらゐる
おりへたち塩もらてしかも山館吹井の浦にてそ鳴まろ
まろくひ吹井のゝれさそふるるせつしまゝれ浪にて鳴也
ちよの浦吹かれるかれ千代や吹鶴のゝふらひまた[illegible]
五十四　一　高師乃浜にて　きよみ　高師の松
あき風乃千よりれ浜の空を見れ松本まてそ高くを吹たてや八
風わたる浪やあかつき乃そ庭さまるにて並みしあまた名をぬるかえ
打渡乃あかしのつまゝれ高師ちよに生まろ松乃緑まそわくさき

一（五十五句之内）逢坂には　鶯　松むし　蝉の丸　逢坂山　駒（こま）
清水　[illegible]　夕付鳥　さねかつら　関の杉
逢坂乃夕付鳥るこゝろまて関の木末も雪やみるらん
あふ坂の関になかるゝ岩清水（いはしみつ）いはて心に思ひこそすれ
名にしおはゝ逢坂山乃さねかつら人にしられてくるよしもかな
あくなくハ逢坂山の[illegible]駒むかへ今やきくらん
逢坂乃関の杉むら[illegible]ゆるや望月の
こまのなきさへも聞ゆなり[illegible]お坂の関（こま）
逢坂乃関の庵りは[illegible]松乃松風を吹
蝉丸乃逢坂に住[illegible]
行と来と世の別れとめて[illegible]清水と人やくらん

逢ふ事の難き坂乃名のみなりけりひとり[illegible]
松津[illegible]源氏石山へ参りけるに
逢坂乃関にて[illegible]行かひける[illegible]の蝉の[illegible]

一（三十六）志賀には　[illegible]　松風　夕浪千鳥　九重（こゝのへ）
山桜　長柄山（なからの山）　辛崎（からさき）　花園（はなその）　[illegible]
[illegible]　[illegible]
さゝ浪や志賀乃山越の九折くる人今もなくあれやしぬらん
あれにけり志賀の都は[illegible]
志賀の浦[illegible]松風[illegible]
志賀乃浦の浪[illegible]
さゝなみや志賀の都はあれにしをむかしなからの山さくらかな

待ちし月乃おぼろなかりし山越えくる舟をまちし志らの浦ぶり
さのすまく見らし海まかせ水鏡志らの浦なれ立そ六まろ
志ののうや花咲く宗山風よ駒とろ袖乞ゆさこと立えぬる
賀茂乃斎院志らゆく水鏡しろへつする山とる
ひえの山わたとおもふに

一（廿七）から崎よまる　松風　夜舟　さゝ波　舟乃綱
水のとくる
いまもせん是ゝ遊乃友ゝ今そ乃毅まるゝ男を
さゝなみや志のうさ紀ゝら八あれと暮らく乃妙錦をつ
さらに見あれとも八角八わ達こそいつとおもふ
水の志らのかつら崎寄そ見くさ波よせる嵐なく

一（廿八）大ひえよまる　宗乃　松むら　鐘乃鳴る　寺
横川　筑紫山　日吉乃社
大ひえや見る山桃まで来乃法蓮のよそいそ乃袖ゑん
大ひえ乃かゝる凡嵐母雲晴るゝ乃山ぞ月をゑくる

一（廿九）田上よまる　網代　まき乃ね紫　琵琶を
氷魚　うの木　海つゝ
月かきの田上乃清き瀬しへ下がの川のかれたるをみる
田上や紫生を網も水鳥達ハしとや真柴ねぬ紫のぬれん
ゑらくと紫を田上山乃この木ハうち渇ちまる山れなるよう
せるある田上川の光かやみき渡くまの落そ見ゑらぬ

一（卅）比良の山よまる　海きく　釣舟　擁む　まの浦

椎川　拾遺中　大ひゑ

都ゆくさむきそ渡きる峯あらしの吹しく尾上山雪ふりまさり

吹おろすひら乃山風さむからし波のうへ人衣うつなり

ひまなくさゝ神のふもとより吹くたりひら乃高ねは山のあらし

我舟はひら乃湊にこきはてむ沖へなさかりさ夜ふけにけり

暮されてひらの山風吹ならし舟のわたりはまて

七十
一 夕霧の思よ六　ちから乃あまねき猿乃みやこ海乃上なり

松虫　さえくさ　浦くさ　鳥が音　浮田の杜　あきちの露

夕霧乃思のまくらもなきくさの秋の袖を

夕くれ思乃夕風立て萱ならて小河ゑみかゝる

うさぎくゐはひら乃浪はや夕なぎさる舟ならの思

夕くれ乃思の浦あきち露ぬらくもなれの浮てやよさむらん

水くさの思れみなとの浪乃ゝよりさきら紀撫く海か浦

乃ちさき乃思への秋ぬ萬からくへやこえ松むしの聲

六十六
一 須磨山にて　紅葉　ちどりの海　松虫　ちどり乃鳴

さしもは

まつ須磨乃山の紅葉にちおりて暮そ松虫のこゑ

さをしかの須磨乃嶽乃山おろしにおちて千鳥なく海

あさからや須磨のあのもしまの夜さむを見よとして

秋もこそ須磨乃山をわかれゆく鹿のなきさの鳴らん

六十三
一 萬葉浦嶋十六　まくら乃露　鶴鳴　舞

よりせこうかりまのこゝろあきのの鶉（うう）鳴なるなまくれけい

あきのの乃せく猿乃蕎角（きさゝつの）こあらぬさくうあいむ駒（こま）そいさめつ

一六十四 猿山よそ　三ケ月　蕎（おとこ）のうき　わか紫　花（おなか）さう

月　猿奴　露（うう）乃雪

霜のうへもあらぬ蕎のうへ山杉もさかくおそうかそさと

猿山いさ云あらくみそ杉ん年毎めうこれきめしめうと

わかさかう猿乃山の岩蕎（うう）きい紙うそもみ代くゝりし

出るも道も冬もくりまうゝ山まてなそやうよ峯の白雪

猿山やまようさくかり猿奴道いわ紫ふわくきあかしみうら

一六十五 まのよそ　鶉（うう）鳴　尾花　蕎（をき）原

鶉すくまあ入る元の浜（をまく）風よお花添あうわさ乃かいくま道

そく露猿も出れんぬれ猿うききよ乃く道てくさなうまの蕎（ちう）

ほきかりもあそひく杉んう嵐もよし海の萩紫風吹は（うう）

一六十六より もる山よい　下紫の文付　猿奴　わか紫　白露

出る春も猿奴（しれ）もいくまる山い下紫のこゝ次文付よう

猿奴のこまる山のき乃下紅紫ハ抱さふ神のかむ也のこゝ浅

うきくの淺猿奴くまる山そ神ものこゝ浅わか紫おなう

白露乃あまる山風のいさみん神ありまうき露乃紅葉も

一六十七より 一周鶉山よそ　露乃松　秋乃田面（たのも）

秋の田乃いまも丸峯よ吹風乃方あかむ数八分乃こ尾花も

さかふよも秋の田毎よ春そまくいまもの山も松乃白雪

色よきれいま十乃山の岩小おかるまいとしるへと海くん

先立しも乃思のつのかたら給ふま中閑云（きうん）いふす

六十八ふはのせき
一不破関よりて　杉むら　板庇（ひさし）　野上乃里（のかミ）　鈴虫（すゞむし）
乃風へくらかへす関乃あらしや
秋の風

旅乃みか雨ふるやと更不破の関屋に板まもる月
東路のふるき関屋の跡ならむまやよわりとはひもふ

六十九くらゐ山
一位山よりて　松陰（かけ）　霰乃ふるをとゆる　月をと紀ふ
雲乃きさなる
あむらき紀見るひく雲か志る人もなく位の山乃麓をあるはん
位山かしおふ松乃か枝よのそくぬのむかさへも年をふるら

七十きそし
一木曽路よりて　寝覚川　木曽路（きそち）　うつゝ

さくしかの山の嵐を越むる木曽路の雲か月よ寝く
さくしけやまるまる月の里人屋すくさめらぬく寝ありけり
緒ちり機ちの乃空の木曽路のぬく月を更紀さくしかの里
七十一きそち
一木曽路よりて　小野原　寝覚　丸木橋　里月の
志賀乃やまその丸さ丸小野原ふ紀ゆうやあの
おもしや木曽路の寝ちの丸木橋ふうみえしひよ藤の
紀よふるきを木曽のかけ橋引まくし雲をおもゆらかり月の
七十二
一まそしの海よりて　おきさ沖　月さゆる
月さ雨らなきの空を紀ふらおらお乃よてお出てふむ
まそしの海おちかなの色を更らさその麻衣きもまくら
須を乃海お乃か色ちくやふる袖のまくら落る嫁くらし

七十二さのゝふなはし 一佐野乃舟橋よみ　手馴（なれ）乃駒　くもり　寄女

はらく

上野やさのゝくらち橋わたりしもの人とまかし渡りも

夕ぐれ雲とよさ打て舟橋かけとまかりて手馴の駒乃跡りてるやと

瀬ゝを行せしさのゝ中河はるかなる夕日に流の末ゑは

名月夜のひかりよかけ遠き瀬（せぎえ）後しくさのゝ中河舟ぞよかりけん

七十四くろかみ 一黒髪山よみ　山菅（すげ）　小夜ぶる

もみ乃くろかみ山の山菅よ小夜ふけて清くさく思ふ

旅人の夜寒き乃まき（まき）やくらゐぬくろかみ山の名月夜乃光

七十五 一宮上河よみ　筆乃まき稿　拾舟

とりこ河の遠くなるいなみ舟のいなふねあさ渡志ゆきて岸

とりこ河うきこそおろし笠ぬ舟のはかり遠くなる岸のまつ杉

七十六 一思ふ山よみ　初しぐれ　まつ菱原　女郎花　施

思はるし　當　ゑもる稿

まつ悲しき思の山乃まき寄りてまかせ志る人をまつ

かとく来る紅葉を思ふ山ゑのゝくものうきこそ鳴るる

るふとく紅葉の思乃かくまて下し出し初まて寄ゑんゑん

思はれしいきそやそむろ思ふ山ゝ乃おくのいろ紅葉まく

まの遠乃ゝ春まやひら思ふ山むもよこゝをまろくひき乃思

ゑもろ〃押むむ乃おくまし遠思乃山のおくとをすゝめく

七十七末松 一末松山よみ　白浪　鶴（つる）の飛（とび）行　鐘ひくも

花乃ちる　ゑもる稿　寺乃鐘（かね）

しら浪のこゝもこそとみる卯花のさかりうきねや末乃松山

初しもあれは末の松山浪越てくゝらさしるめにうつるかりかね

春乃紅来たれは松山浪こさまよかとも見えつのたるやちりらん

ちらりとおかてゝは神代志ぬ出て来乃松山浪こさしと八

一　卆八（しま）松嶋より　子きる鳴　わこ歌　わまん人　もしか丈

紅葉ふきろ

松嶋や磯よむ道のかりこ汐乃なき丸うさ波く見しる君ぞ

松嶋やんふわる汐まの浪ひさし浪の花ちるよ見るも月

鵜るるよそんひのへよそゝ清く人松嶋乃あまのうしお火

あまの袖おうそひうねく松嶋を下紅葉ふきろ秋そう月さ

松嶋やそうまの汐まの袖うすそ月やされとハあまぬ物うら

一　卆九（しおかま）塩竈より　鶴子　安藝（もろ）　朧（おぼろ）月夜

塩かまのうら見く海る鶴か波の上よりたつ海へかすみ

手代折りふ数をえてし塩かま出た二鳴く波乃松のうら霧

春をまついろゝそん塩かまの鵜も子て手すゝ煙て

雲の浪かまての浪ハえ丸おなら月夜乃塩かまの浦

一　八十　白河乃関（せき）より　くまかえ　紅葉　本ろうし

是より三八数へ清きよりかね見てぞ越行白河の丸関

おもしく八行てや山まし白河乃関のあらし丸塩かまのうら

なみをあをれ松あきまて白河の関乃ひたり

そあ本へ数本のや春る秋の春ひさき白河乃関のわしま

白河乃関の見しおを縁まハ松ろそなの名に夜遊々に

是も山城乃白川を

（八十一）一 愛発（あらち）山ニハ　浅茅（あさち）か原　あは雪　嵐の風　枯ね

矢田の野に浅茅色づくあらち山峯のあは雪さむく散らし

あらち山ゝの木すゑも紅葉して白雪

初淡雪ふりにしかとあらち山あらしの山合ふのるまゝく

雪ふらハあらちの山をこゆるかなその夜ハますまいよゝまさん

（八十二）一 後山ニハ　雪浄き庭　萩の花くれ（こきて）　越路（こしち）乃枯ね

名にし山のこゑ也しよ名残なき思ひくらへん哥

越人人の山路を行きぬぬと思ひしかぬ秋乃夕く秋

あらしにも松吹く雪ふかき月かゝる山人

かゝるねのむかしは峯くもる山家にまつ夜ひかハ

（八十三）一 白山ニハ　雪乃消さる　菊（きく）ゆくに

初雪に去年の消ゆることもみぬ雪乃白山

君をのミ思ひこしちの白山ハいつかハ雪のきゆる時ある

（八十四）一 行乃浦ニハ　かもとね　むしもとも

年をへて行乃浦風吹きぬらく真砂（まさこ）よあらぬ秋の夜かね

波こゝによる行のまゝ里乃むしろ早乙女（さをとめ）かれて秋せくよあひよ（くれなゐ）

（八十五）一 荒磯（ありそ）海ニハ　浜（はま）の真砂　忘草（くさ）　うつせ貝（つき）

我恋ハよむともつきし有曽海の浜乃真砂ハよミつくすとも

大海のあらき磯かも寄浪の打ちかへしやあひ見まるらん

思ふこと有その海乃うつせ貝（あは）あはてわかれめのなそやおさん

きそ海乃浪にまかきくらし海士（あま）の息（いき）つき（つき）かも寄せ来る

八十六たご
一多古乃浦　浮嶋　網代　[illegible]　清見

入江　富士の嶺

[illegible]

[illegible]山の[illegible]

[illegible]網代[illegible]入[illegible]らん

駿河乃国[illegible]の付合[illegible]

八十七
一大江山よし　夕立　日光　生野　さねかつら

[illegible]　鹿のね

大江山[illegible]

おほえ山[illegible]鹿の[illegible]生野を越て[illegible]らん

大江山夕立[illegible]入日[illegible]の

[illegible]大江山こえていくの[illegible]

丹波路や大江乃山のさねかつらたえん心乃わかおもはなくに

大江山いくのの道の遠けれはまたふみもみすあまのはし立

八十八いくの
一生野よし　卯花　[illegible]　布さらし　女郎花

卯花も乃さ[illegible]布さらし[illegible]の里[illegible]

[illegible]の[illegible]女郎花も秋[illegible]

八十九よさのうみ
一与佐海よし　松風　千鳥　橋立　和布

[illegible]のよさの[illegible]

[illegible]

九十
一[illegible]よし　[illegible]　手孤の錦

[illegible]の[illegible]乃

名乃江の海こそ今ハ生ぬ人も知れ乃跡をたちちらく殘く

九十一
一　三尾乃浦ニハ　和布とる　釣舟　松原

此やまとこおの浦をまうてく志かの神の氣色を

きゝる乃ことわり付合を引そよし

九十二　いなの
一　稲野ニハ　笹も　あさち　山本

いなくまれてあらん乃稲野のあさちの上ニ嵐を月

稲野や山本遠く見渡せをおもしろ松のむらたち　和歌ニ立

九十三　あかしの
一　明石浦ニハ　かこまき　手ゐる　松蔭

明石の志かへ　親子の中　釣舟　さ法しう

二志きえ乃ハ出浦あるいく様あしのどまりかゝまりとも

よ法こあるく明石の浦をつき出ハちらる小中の三線係の志

灯乃あかしのうら女房をゆくこゑぬころ旅乃夕くれ

須磨より移りきし人丸の流たる乃松かけ

猶日ハ暮を志らぬや律まくとぞうあかしのうらさびしさを

堂ちあかしの入道乃方あゆみきぬるおごる心を

ありしくの后源氏をまいらせ姫をあさましきまでさも

やと志てんあかしく源氏への方や

猿殺うらあふされあかしの月乃物を哀をむさと波

是ハ源氏乃流ある乃なりも後源氏ちらむきぬの

かくへなみまく海あくこの中とハ姫と父の心

九十四
一　志らの海ニハ　海人　あひさす　けうのけう舟

まつ遠く浪まかせ海に見えて出あく志まの市よ出る里人

たかまかの志まの里は海と藍(あい)のいけらそのゝ名をは苦へさ
茅のきもしぐるゝ時や秋人の志のまのちらふなぬさるらん
春霞志かまのうらをへたつれハおほろなるらしやあまのつり舟
みなとそおもふ志かまの海に出てやなきもやいるらむ

一（九十五　たかさご）たかさごには　尾上の鐘　松　廉　楼　鶯

秋霧乃たちもかくせるたかさごの尾上の志かのこゑいまやすく絶
浪まくら又ねつくまるたかさごの松の上毛いかゞ渡さらぬと
たかさご乃尾上のかねの音すなり暁かけて霜やおくらん
たかさごのすゑの松ハみとりにて尾上の桜ゆきとこそ見れ
千とせふる松ハかはらでわかさくゝ尾上によるとも鶯の声

一（九十六　きびの）吉備の中山には　真金(まかね)吹て　鶯の声　細谷川　帯

真金吹きびの中山おびにせるほそ谷川乃音のさやけさ
鶯の鳴にかくれて真金(まかね)ふくきびの山人ハ春をしるらん
春くれどもかすめるの霞にて松ハいくへぞきびの中山

一（九十七）松帆(まつほ)の浦には　田鶴(たつ)　松原　釣舟　藻塩(もしほ)
満汐(みちしほ)　浜千鳥(はまちどり)　夕月夜

こぬ海をまつほのうらのおほ波にかよふ風
まつほの浦ハ塩さびれは松ほのうらのあきつしまかさそふ浪
けふそ見る松乃もとしるくおもふまのあまの釣舟
秋風にやまとのほかのうみのおもやみえん
まつのうらや霧の夕月夜の浦のこゑ

一（九十八　ふきあげ）吹上乃浜には　千鳥　月乃まむ　おきつ川

月そともむく種々あくまくとの虫乃峡上のなよる稲（ひら）吹もさん
夕露波峡上乃濱のこれ波みえとらふ白々くおとり川白浪
喜乃秋の白ぬめしもなるしき乱恩の峡上乃濱よりさむ月影
闇しとあまき老浪とそむかぬ風乃峡上の濱ふあすてり白雲
秋風乃峡上すまさる白菊八もすりあらぬる浪乃よせつつ

弐十九ミミ
一 須磨聯よりは　駒（こま）留む　濱（はま）中ふ　かとく露を

五くも袋（いさ）　なつさ乃露

須磨聯よ駒乃留めるあ絹から志とそま浪打て啼
老くまの濱中ふ寒く闇あ鳴ねあさねよりて秋なれども（ふ建）
く海乃汐てくと袋乃とあれ本さ濱つとあれぬ浪の白露
くまそやあるく海乃えよれあ袋乃その名しぬそなその衣あすき引

須磨野のうらうらをまよまさ露のたまぬむ白乃影もへ一代ん

百々
一 那智（ち）乃山よりは　瀧（たき）乃糸（いと）　海ほとり

あらの山あるふおほる瀧川をよるく心のちらそ袖ら

百
一 うら磨山よりは　浦（のう）の浙　玉の月　玉河乃え

松の雪

峡乃をとの山乃本川藤やあまき乃下露をまあけの月
ふまそてもくるやあるん狭へのうら磨乃おくれむ汐乃名
白れあへくをさえまてうら磨山まるまき浪乃浦（このう）の浙

百三のま
一 須磨濱り浦（さき）よりは　おもい　ふりくも　鶉（うら）　糸藤（きさき）

さゆり花　むら菊　萩の色

浪ちふ須磨より花よ独ぬまきくお花もうし乾ねぬうとまけ

浪よするの浦かき紀乃まくらをしとむ虫の声かな　定

風ふけハ浪ま床のあれぬらん難波のうきねかすくや

小萩さく野の鶴かえに風さえて寄る浪の於る月かな

浪のよる難波の浦乃あきを花これよりかみぬ夕乃ほむ

抱せぬ草木も今や志かりさん難波の浦のとまき村数

志かみくいのまつ浦乃さゆかも入ぬか磯（いそ）の月影乃ほ

一 百三 塩竈にて　しほる　塩風　松　紀念　吹（ふけ）井のうら

あまのと舟　枕さしの紀

しほる塩竈かいそさむくなハ秋寸てまとにすめ

さよふけ吹井のうら秋つまく塩竈か磯に月かさよふさぬ

みをと山おも小吹塩風にふかまの松に浪やかけん

松原に小あみ引わのくるゆるやあまり磯のあまのつり舟

椿咲しまつ磯をもしくはまへとる抱そえもかなはなかる

一 百四 志賀（しか）の浦にハ　海士の釣舟　いさり火　しほ焼（やく）

志賀乃あまの釣しくさまもいさり火乃わのかの妹（いも）と見のかも

志かの浦まて塩やく煙（けふり）いてもまたしのかそ山まてあり

東（あつま）江乃志かの付合を付くよし

一 百五 鞆（ちくさ）浦にて　松原　神垣（うこさ）

子もやまつ神代をかけし鞆浦乃松ハ久しきちかしせなら

一 百六 松浦（まつら）にて　舟人　もろこしとおもふ　お花（いわ）

それはかりも志らぬ別（わかれ）の海こさハ松浦の岩（やさき）を出る舟人

さよ姫の袖ふりし松浦山まてそのよりめくおもひしら

君によし心すゝむる松浦がた猿の声をきゝてもかなしきん

一百七 大淀（おほよど）の浦によむ　松乃むら立　みなあみる　鳴る鶴

友鶴（ともつる）

太よどのうらぢのともに見え来乃日に霧（きり）そのうら松乃むら立

大淀乃松にたゝすむあるかくふたりかくのもそへるなかりけれ

見えていせの舞人（まひうど）乃浜荻なる東屋（あづまや）いせなるうらかう

あまさく舞人さしる姫小松にたくはゆかしよこする

こゝそうかんく八幡のあかのとよめとてまきゝ宮ゐる

大淀乃うらよりきたる（よる）鶴もありしかのまもふるさと乃鶴舞

大淀の浦にむまれる友鶴の女日乃うきなかのまのり（のり）ときまき

あまれふる見るあかそらそふ大淀乃まつにも露く鳴る波やか

一百八 伊勢海によむ　久鳴る鶴　桜貝（さくらがひ）　浪の里舞

いせ海乃うらむ塩のかたらおきさへ鳴るや鶴乃くるやゆる

いせの海よりまよふ浪のさくら貝のかゝるるにふる花のさかゆ

はる乃浜やおきつ川ま日のかゝる紀の出へき積てあまの鈎舞

一百九 二見（ふたみ）浦によむ　夕月　浜荻（はまをぎ）

むくまきこのかたの夕月枝わかきてもこゑ八ヶ物ちかくかり

二見かたいせの浜荻夜さへ乃杖よろめき蓑えむすびと次

一百十 鈴鹿河（すゞかがは）によむ　八十瀬（やそせ）の浪　舞人（いまきのとや）

あまきすれもつる河原にあく浪のまよふ明かく影てそふ

鈴鹿河八十瀬の浪にぬるまくていせまゐく維（これ）も恋かさん

きたえ条乃文もそれのいせへかちすかくゝ源氏へ乃

百七
一鳴海乃海には　浪のかゝる　濱千鳥　あらむつ　鴫
　濱楸　塩のさしひ

さくるらちらくあるゝ乃濱千鳥鳴ねを塩のさしひにそ知る

中空よりさしくる塩のあるとの雁乃夕暮は

とふかのゝなれのゝし乃夕煙ちるも乃中よりつらもまん

あまのする浪のゝかれ濱楸あとまくのこそ年へぬらめ

鳴海のかゝ沖にむせのあらむかれさとく風のさはくやらん

百十二
一忘れの小舟　渡し舟　さひ人

いとくとりはきあれ渡せる人を渡の行衛ゆへよ

百十三
二小夜中山　東をつくる　葉茶　雪

伏見の枕乃床の末あれにふくや嵐乃さよの中山

月よりさよの中山中〳〵にあはすくてそ恋しかりける

葉乃下ふきこゆる乃中山中山風よかの夏衣ののを

旅人の夢ほすまとりまとく夢見さよの中山ふたや越らん

嵐ふく楼乃高根おもへ心越ぬらんさよの中山

年たけて又越ゆへしとおもひきや命なりけりさよの中山

百十四
一引佐細江には　棚無小舟　まこも

猫全乃羽志おもへるとまこもかるいなさ細江にあまりつゝ

百十五
一濱名のはしには　橋　引網　棚無小舟

打渡す濱名の橋乃入潮にぬらし小舟漕ぞわづらふ

東路乃はまなの橋にかゝる引網をさそ結ぶらむ坂の関

一百十六
一田子よりは　富士乃ね　烟りたつ　清見かた

たこの浦に打出てみれは白妙の冨士のたかねに雪は降つゝ

百十七うきしま
一浮嶋には　松　富士のね　あしたか山

さよちとりとき

あしたかや関路（せきぢ）をこゆれは浮嶋見えて松にかゝる
ゆらぬ山は雪なき乃雲の月のうつろふ浮嶋か原
さよある影もなく浪乃上にあらはれ月乃浮しま（しきしま）
吹落る富士乃山かせ見えて下霜（しも）かまよふ浮嶋か原（ちとり）
打寄る浪かけ月のかけにみえ浪のうへにますらちとり

百十八
一清見かたには　鐘（かね）の声　寺　磯（いそ）　千鳥

清見かた関吹こゆる秋風に浪とそ見ゆるあら磯乃月

清見かた鐘の声さへ浪（すさき）にきこえの松をこに月をあきらか
ちらぬねと一夜さるとや清見かた浪よするてありとこの里
清見かたひとつ御船乃かまくら秋のさ浪の猶のこる

百十九ふし
一富士には　雪のけふりる　むさし野　田子乃うら

ふしのねに烟をたつる夕煙（ゆふけ）そらに立あらはれて
ゆらぬ山ふしのけふりはくかねの浦にさらに雪の中にらん
きえぬ葉（ひ）平乃けふりさへ乃けふりにも
の山は猶なく夕月の海つに雪のあるを見ゆかなく

百廿うつ
一宇津乃山　蔦（つた）の葉　紅乃文　岡部（おかべ）乃里

とふしらぬともかゝる

うつの山にあふ乃何もうつゝにも夢にも人にあはぬなりけり

もろかるゝ川乃山家のうつまきも[illegible]今はあらた[illegible]

花ぞ東平の[illegible]川乃山[illegible]

あひ[illegible]の[illegible]ぞよ[illegible]とも[illegible]

[illegible]川乃山[illegible]の[illegible]を[illegible]さくらの[illegible]をそ[illegible]

百廿一つくば
一筑波山によめる　玉葉　読人不知

ちらさしとそへらん袖[illegible]ね山おろしもえゆる紅葉の[illegible]

[illegible]筑波乃山[illegible]

筑波山にも紫の雲[illegible]二[illegible]か[illegible]

百廿二あしから
一足柄によめる　小葉　[illegible]

わくら乃山のもみぢもちるらん今は清見か関に秋風そ吹

足柄の山ハ[illegible]富士の高根乃積[illegible]

百廿三むさし
一武蔵野によめる　[illegible]かや　[illegible]　兼の子
富士の根　忠の子　女の子も　[illegible]

むさし野ハ[illegible]やかて[illegible]えぬれ[illegible]

[illegible]人乃[illegible]とむさしのハ[illegible]

また[illegible]くらの[illegible]

[illegible]袖によむ[illegible]のね[illegible]

むさしの[illegible]月[illegible]おもかけ[illegible]

[illegible]八[illegible]今[illegible]やと[illegible]の[illegible]

むさし野ハ月の入[illegible]山[illegible]より出[illegible]

百廿四すみだ
一隅田河によめる　[illegible]　[illegible]

[illegible]河[illegible]ぞ[illegible]

あまひ又須磨かへんハ須磨のあるそかゝれ秋乃月かな
なかにおもしろくいさゝかゝん歌ある故思ふ今となやすしむかと
あはれさ里乃ひとりあの所のありいと細殿にむさし乃
山と下総乃国との中にあたれる所なりと紀にも見え
金所といふその所ふくる所みえあり　但今
所いこなき所ありいこなくしく[illegible]ぬよしかり
いほりさやゆふあをえてあさもまつち山ともこ所原は秋風ぞ吹

百六十五
一　霞浦によせ
あさまだき須磨乃あたりま　あまのいさり火　もしほくむ
晴やらぬ霞のうらにたちわたるあまのもしほのけぶりなりけり
志ほやくや霧乃浦のあかつきのかすみの下のけぶりなるらん

立まし霧乃そ乃夕煙志ほやくもせめあまのもしほ火

百六十六　つくば
一　筑波山によせ　暁の鐘　あかし山　松山　志ら雲
つくば山志げき木乃枝のもとしげみなくぬハ人乃心なりけり
暁乃月のひかりもつくば山今よりまさぬとこのまくらに
あしびきやまとかへ筑波ねのそらのくもをみるかな
つくばねやしら雲かゝる松乃かねのかきのさむきさとしらせ
つくばねの嶺より落るみなの川あひてはいのちのふちとなりけり

百六十七　あさち
一　浅茅によせ　稀なる　難波　足袋　あまの
入日　月おる　麻の子
あさち原河原の下にすみなれてふるさとのあさぢがもとにやまがくれ
船ゆふべに見えてさまよへる行衆の宿乃むらひ乃浅茅原の山

あくらかくさうきうの鳴鶯（うくひす）よく板をさめしを夜の関守（せきもり）
秋ならぬあくらの徳なる雨よかくて月をきくらうき
入日月おつるを待ちて清浪（かくら）を為なり

何楽集吉本新板

寛永十四年
西村又左衛門梓

子七〇上下弐

中